木曽免遺跡６区

2021.3

埼玉県坂戸市教育委員会

木曽免遺跡６区

2021.3

埼玉県坂戸市教育委員会

序

坂戸市は、埼玉県のほぼ中央に位置し、地勢はおおむね平坦で市内を流れる越辺川や高麗川をはじめとした豊かな水量を堪える多くの中小河川によって、肥沃な耕地と居住に適した環境が整えられました。その結果、約１万５千年前から続く先人たちの生活の痕跡は大地に刻み込まれ、遺跡として今もなお私たちの足元に眠っています。

今回報告する「木曽免遺跡」は、坂戸市北東部の台地縁辺部に位置する遺跡で、個人住宅の建設に先んじて記録保存措置を講じたものであります。

今回の発掘調査では、縄文時代から弥生時代後期の集落や、弥生時代中期の方形周溝墓が発見されました。特に１号方形周溝墓の周溝からは、多数の弥生土器が出土し、坂戸市のみならず埼玉県内の弥生時代を理解するうえで、欠かすこのことできない貴重な一括資料となりました。

このような調査や資料の整理を経て、古代から繋がる歴史の一つ一つが解明され、学術研究の基礎資料として、広く活用いただくことを願っております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで地権者をはじめ、多くの関係者の方々にご協力賜りましたことに深く感謝を申しあげます。

令和３年３月

坂戸市教育委員会

教育長　安　齊　敏　雄

例　言

1　本書は、埼玉県坂戸市に所在する木曽免遺跡６区の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、個人住宅建設に伴う事前の記録保存を目的として、坂戸市教育委員会が実施した。所在地および調査期間、担当者は以下のとおりである。

　所在地：埼玉県坂戸市大字小沼地内

　調査期間：平成 26 年９月 30 日～平成 26 年 11 月６日

　担当者：藤野一之 (坂戸市教育委員会　平成 26 年度当時)

3　整理作業は藤野が担当し、報告書刊行作業は山本良太 (坂戸市教育委員会) が担当した。遺物実測・図版作成、報告書刊行作業については有限会社毛野考古学研究所に委託した。整理期間は以下のとおりである。

　整理作業：平成 27 年１月～平成 27 年２月

　遺物実測・図版等作成作業：平成 30 年５月 25 日～平成 30 年 11 月 30 日

　報告書刊行作業：令和２年９月 10 日～令和３年３月 26 日

4　本書の編集は山本、春里桃子（有限会社毛野考古学研究所）が担当した。執筆はⅠ、Ⅱ、Ⅲ－１、Ⅳ－(2) を山本、Ⅲ－２～５を春里、Ⅳ－(1) を宮本久子（有限会社毛野考古学研究所）が分担した。

5　発掘調査における基準点は株式会社セントラル測量に委託した。

6　発掘調査における空中写真撮影は有限会社椿測量に委託した。

7　発掘調査資料及び出土遺物は坂戸市教育委員会で保管している。

凡　例

1　掲載した遺構平面図・断面図の縮尺は、1/150、1/100、1/60、1/30 を基本としている。いずれの場合も挿図中にスケールを付してある。

2　遺構平面図の遺物出土地点番号は、遺物図の番号と一致する。

3　遺物図の縮尺は土器は 1/4、石器は 1/3 を基本としており、いずれの図にもスケールを付した。

4　遺構平面図および遺物図のトーンについては、下記の通りである。

遺構平面図：焼土範囲・・・

遺物図：赤彩範囲・・・

5　遺物観察表における凡例は、下記の通りである。

・法量の単位は全てcm、重量についてはgで記載した。

・(　) 内の数値は、推定値を示す。

・胎土は肉眼で観察できるものを次のように示した。

石英＝石　長石＝長　海綿状骨針＝針　凝灰岩＝凝　片岩＝片　輝石＝輝　雲母＝雲　角閃石＝角　チャート＝チ　白色砂粒＝白

・焼成は、「良好」・「普通」・「不良」の３段階に分けた。

・色調は、『新版標準土色帖』2014 年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修）に即した。

6　本文における（　）内の数値は、残存値を示す。

7　本書に使用した地図類について、第１図は『新編埼玉県史別編３　自然』中の「第２図　埼玉県の地形区分と名称」をもとに作成した。第２図については国土地理院発行の 1/50,000 地形図『川越』・『川島』・『熊谷』、第３図については坂戸市発行の 1/2,500『坂戸市基本図』を使用した。

8　調査区全体の座標は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅸ系を使用した。なお、遺構平面図に記入した方位は、座標北を示す。

目　次

序
例　言
凡　例
目　次
Ⅰ　発掘調査の概要……1
　1　発掘調査に至る経過……1
　2　発掘調査の経過……1
　3　発掘調査の方法……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境……2
　1　地理的環境……2
　2　歴史的環境……2
Ⅲ　発見された遺構と遺物……8
　1　遺跡の概要……8
　2　方形周溝墓……10
　3　竪穴住居跡……24
　4　溝……28
　5　遺構外出土遺物……30
Ⅳ　総括……31
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第 1 図　埼玉県の地形……2
第 2 図　周辺の主要遺跡分布図……4
第 3 図　木曽免遺跡位置図……9
第 4 図　木曽免遺跡６区全測図……10
第 5 図　１号方形周溝墓（１）……11
第 6 図　１号方形周溝墓（２）……12
第 7 図　１号方形周溝墓（３）……13
第 8 図　１号方形周溝墓遺物出土状況（１）……14
第 9 図　１号方形周溝墓遺物出土状況（２）……14
第10図　１号方形周溝墓遺物出土状況（３）……15
第11図　１号方形周溝墓遺物微細図（１）……16
第12図　１号方形周溝墓遺物微細図（２）……16
第13図　１号方形周溝墓出土遺物（１）……17
第14図　１号方形周溝墓出土遺物（２）……18
第15図　１号方形周溝墓出土遺物（３）……19
第16図　１号方形周溝墓出土遺物（４）……20
第17図　１号住居跡……24
第18図　１号住居跡出土遺物……25
第19図　２号住居跡出土遺物……25
第20図　２号住居跡……26
第21図　２号住居跡炉……26
第22図　３号住居跡……27
第23図　３号住居跡炉……28
第24図　３号住居跡出土遺物……28
第25図　１号溝……29
第26図　遺構外出土遺物……30
第27図　木曽免遺跡における
　　弥生時代から古墳時代の遺構分布……32

挿表目次

第１表　周辺の主要遺跡一覧表……5
第２表　１号方形周溝墓出土遺物観察表……21
第３表　１号住居跡出土遺物観察表……25
第４表　２号住居跡出土遺物観察表……25
第５表　３号住居跡出土遺物観察表……28
第６表　遺構外出土遺物観察表……30

写真目次

図版１　１　調査区遠景
　　２　調査区全景
図版２　１　１号方形周溝墓　東周溝
　　２　１号方形周溝墓　南周溝
　　３　１号方形周溝墓　北周溝
　　４　１号方形周溝墓　東周溝遺物出土状況
　　５　１号方形周溝墓　南周溝遺物出土状況
　　６　１号方形周溝墓　北周溝遺物出土状況
　　７　１号埋葬施設・２号埋葬施設
　　８　１号埋葬施設　Ｅ・Ｆライン土層断面
図版３　１　２号埋葬施設　Ｈ・Ｉライン土層断面
　　２　１号方形周溝墓　Ｃライン土層断面
　　３　１号住居跡
　　４　２号住居跡
　　５　２号住居跡炉
　　６　３号住居跡
　　７　３号住居跡炉
　　８　１号溝
図版４　１　１号方形周溝墓　第13図１
　　２　１号方形周溝墓　第13図２
　　３　１号方形周溝墓　第13図３
　　４　１号方形周溝墓　第14図４
　　５　１号方形周溝墓　第14図５
　　６　１号方形周溝墓　第14図６
　　７　１号方形周溝墓　第14図７
図版５　１　１号方形周溝墓　第14図９
　　２　１号方形周溝墓　第14図10
　　３　１号方形周溝墓　第14図11
　　４　１号方形周溝墓　第15図15
　　５　１号方形周溝墓　第15図16
　　６　１号方形周溝墓　第15図17
　　７　１号方形周溝墓　第15図18
　　８　１号方形周溝墓　第15図13・20
図版６　１　１号方形周溝墓　第16図38
　　２　１号住居跡　第18図１
　　３　１号住居跡　第18図２
　　４　３号住居跡　第24図１
　　５　３号住居跡　第24図２
　　６　遺構外出土遺物　第26図６
　　７　遺構外出土遺物　第26図１～５

Ⅰ　発掘調査の概要

1　発掘調査に至る経過

平成26年9月1日、坂戸市大字小沼字木曽免970番1での個人住宅建設計画に伴い、事業者から開発予定地内における埋蔵文化財の有無と、その取扱いについての事前協議書が提出された。

これを受け、平成26年9月19日に試掘確認調査を実施したところ、申請地のほぼ全面において多数の遺構が確認され、当該地における埋蔵文化財の所在が明らかとなった。その後、試掘確認調査の結果をもとに事業者と埋蔵文化財の取扱いについて協議を実施したが、遺構の確認されている箇所における保護層の確保は難しく、現状保存は不可能と判断された。そのため、市教育委員会が調査主体となり、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

発掘調査の実施にあたり、平成26年10月1日付け坂教社発第485号で埋蔵文化財発掘の届出を埼玉県教育委員会教育長あてへ進達した。これに対し、埼玉県教育委員会から平成26年10月14日付け教生文第4－971号で指示通知を受けた。また、埋蔵文化財発掘調査の通知は平成26年10月1日付け坂教社発第492号で埼玉県教育委員会教育長あてへ通知した。

2　発掘調査の経過

発掘調査は平成26年9月30日から開始し、同年11月6日まで実施し、実働18日に亘った。発掘調査の経過についてはおおむね以下のとおりである。

9月30日(火)　表土掘削および排土の搬出。
10月1日(水)　表土掘削および現場器材の搬入。
10月2日(木)　遺構確認作業、基準点測量。1号方形周溝墓および1号住居跡の調査を開始。
10月3日(金)　2号住居跡の調査開始。
10月7日(火)　1号方形周溝墓の掘削過程で3号住居跡を確認、調査を開始。
10月30日(木)　空撮実施。
11月4日(火)　現場機材の撤収。
11月5日(水)　埋戻しを開始。
11月6日(木)　埋戻しが完了し、調査終了。

3　発掘調査の方法

遺構が調査区内のほぼ全域で確認されたため、表土除去で生じた廃土については、調査区外に搬出した。

遺構平面図及び遺物取り上げについては、トータルステーションを用いた。遺構断面図は基本的に1/20で作図し、炉及びカマド、埋葬施設については平面図・断面図ともに1/10で作図した。遺構写真については、デジタル一眼レフカメラを使用した。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

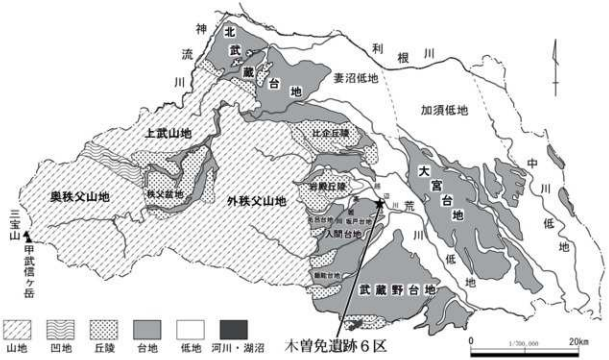
1　地理的環境

坂戸市は埼玉県の中央部よりやや南に位置し、西側に外秩父山地を臨む。周辺の地形をみると、低地、自然堤防、台地、丘陵に大別されるが、市域の大部分は入間台地上にあるため比較的平坦で起伏の少ない地形である（第１図）。

入間台地は、荒川水系の入間川・越辺川・高麗川によって形成された扇状地性の台地であり、坂戸台地・毛呂台地・飯能台地に区分される。坂戸台地は、高麗川以東に広がる台地であり、坂戸市域では飯盛川や谷治川、大谷川などの中小河川によって開析されるが、起伏は比較的少なく、平坦面が広がる。一方、毛呂台地は高麗川と越辺川に挟まれており、西側は毛呂山丘陵や外秩父山地と接していることから、坂戸台地に比べ面積は狭い。台地のほぼ中央には葛川が流れており、坂戸市域においては馬の背状の台地となっている。坂戸市以北をみると、越辺川と都幾川に挟まれた高坂台地、都幾川と市野川に挟まれた東松山台地などが形成されている。

市域の大半を台地が占めている一方で、市の北側及び東側の台地縁辺部には、越辺川によって形成された沖積平野が広がっており、現在もなお水田地帯として利用されている。また、越辺川は鳩山町・東松山市・川島町との市町境にもなっている。

毛呂台地の南西側には毛呂山丘陵、高坂台地の西側に岩殿丘陵、東松山台地の北側に比企丘陵が位置している。



第１図　埼玉県の地形

2　歴史的環境

坂戸市北東部の台地上には数多くの遺跡が分布しており、これらについて時代ごとに概観すると以下のとおりである。本書で報告する木曽免遺跡６区において中心となる弥生時代については、坂戸台地の周辺地域も含めて概観していきたい。

旧石器時代・縄文時代

周辺における旧石器時代の遺跡については、中小坂遺跡群などで地元の収集家らよって石器が採

集されていた。発掘調査についてはこれまでは事例が少なかったが、近年の圏央道の建設工事に伴う発掘調査によって成果が急増している。在家遺跡(11)、御新田遺跡(9)、番匠・下道遺跡(8)では後期旧石器時代後半から終末にかけての石器集中遺構等が確認されており、木曽免遺跡(1)においても圏央道建設に伴う発掘調査の際に石器集中等が発見されている。

縄文時代早期の遺跡では、御新田遺跡で撚糸文期の住居跡1軒が発見されたほか、番匠・下道遺跡、木曽免遺跡、北谷遺跡(4)などでは撚糸文や条痕文期の屋外炉が検出されている。これら早期の遺跡は台地内陸部の小河川沿岸に分布し、立地は旧石器時代と類似している。

前期になると遺跡の立地が変化し、台地縁辺部へと展開していく。木曽免遺跡や附島遺跡(5)、景台遺跡(12)などでは関山・黒浜期の住居跡が発見されており、一定規模の集落が形成されていたとみられる。また、番匠・下道遺跡や御新田遺跡などでは黒浜期の住居跡が発見されている。

中期中葉の勝坂期から加曽利E期には、他地域同様に遺跡数が増加している。台地縁辺部では上谷遺跡(13)や景台遺跡で中期中葉の住居跡群が発見されている。台地内陸部の牛原遺跡(10)では環状遺構群が発見されている。

後期以降になると遺跡数は減少傾向にあり、塚越渡戸遺跡(6)、牛原遺跡など台地内陸部に限られる。牛原遺跡では後期初頭の柄鏡形敷石住居跡が検出されている。

弥生時代

坂戸市北東部では、縄文時代後期以降の活動は低調な状態が続き、再び遺跡が展開するようになるのは弥生時代中期以降となる。越辺川低地帯を臨む台地縁辺部には中期後半から遺跡が再び展開していく。木曽免遺跡では、方形周溝墓を伴い環濠をもつ集落が形成され、小支谷を挟み北側に隣接する小沼堀之内遺跡(2)では壺棺墓1基が検出されている。木曽免遺跡の北側にある附島遺跡では、宮ノ台期の住居跡が複数発見されており、埋没河川によって開析され、低地に独立した台地上を集落域としていたことが想定される。台地内陸部では塚越渡戸遺跡で、当該期の住居跡3軒が見つかっており、中部高地系櫛描文の甕や大型打製石斧などが出土している。また、塚越渡戸遺跡の東側に位置する別所遺跡(7)においても中期後半の土器が採集されている。

谷治川と小支谷に囲まれた台地上に位置する柊遺跡(25)では、中期後半櫛描文系とされる壺棺墓2基が検出されている。柊遺跡北側に隣接する新町遺跡(27)では、新町9号墳の調査中に中期後半とみられる頸部に縄文帯をもつ甕が発見されている。

小畔川沿いをみると、左岸台地上にある登戸遺跡(14)で宮ノ台期の住居跡が調査されている。右岸の飯能台地上には、住居跡群と方形周溝墓で構成される宮ノ台期の大規模集落が発見された霞ヶ関遺跡(15)が存在する。

都幾川右岸の早俣低地帯を南に臨む高坂台地では、中期後半の遺跡が多く発見されている。台地縁辺部の代正寺遺跡(55)では住居跡群と方形周溝墓が発見されており、隣接する大西遺跡(54)においても住居跡が確認されている。また、東形遺跡(56)で当該期の遺物が採集されている。

都幾川左岸の東松山台地南側段丘面では、西浦遺跡(63)や野本氏館遺跡(62)で宮ノ台期の住居跡が発見されている。東松山台地東端部の天神原遺跡(61)においても当該期の住居跡が複数調査されている。

また、吉見丘陵の尾根筋には、中期後半の集落域と墓域が発見された大行山遺跡(67)がある。

後期前半になると坂戸台地北部で遺跡数に増加の傾向がみられる。柊遺跡では、数次にわたる調査によって岩鼻段階の遺構が多く発見され、遺跡の全体像が明らかとなりつつある。これまでの調査で、南側では20m級の大型方形周溝墓1基を含む方形周溝墓4基と土器棺が発見され、北側の集落域では住居跡2軒が検出されている。飯盛川を北西に臨む相撲場遺跡(29)では住居跡が3軒発見されており、北東にある勇福寺遺跡(28)では方形周溝墓群が発見され、それぞれが集落域と墓域を構成していたことが明らかとなっている。

第２図　周辺の主要遺跡分布図

東松山市では、前段階に引き続き、代正寺遺跡や大西遺跡のある高坂台地南側と、西浦遺跡、野本氏館遺跡のある東松山台地南側段丘上などに遺跡が存在する。また、早俣低地にある銭塚遺跡 (60)、反町遺跡 (59) でも住居跡や方形周溝墓、土器棺などが調査されている。

都幾川左岸段丘上の雉子山遺跡 (65) では住居跡が確認されており、東側にある附川遺跡 (64) でも当該期の遺物が出土している。

東松山台地から、市ノ川を隔てて対岸にある岩鼻台地上には岩鼻遺跡 (68) がある。発掘調査では、住居跡群や土器棺が発見され、岩鼻式土器の標識遺跡にもなったことから学史的にも重要な遺跡である。遺跡の東側にある八幡遺跡 (69) でも土器棺２基が確認されている。

後期後半になると周辺地域の遺跡数が大幅に増加する。木曽免遺跡や附島遺跡のある坂戸台地北東縁辺部では吉ヶ谷期の住居跡が確認されており、坂戸台地内陸部では飯盛川沿いの鶴ヶ岡遺跡 (33) や一天狗遺跡 (34) において住居跡が発見されている。

高麗川下流域をみると、両岸に吉ヶ谷期の遺跡が多く存在している。右岸にある花影遺跡 (35) では当該期の方形周溝墓が確認されている。花影遺跡の南側にある宮裏遺跡 (36) では、後期後半の住居跡１軒から南関東系の土器を含む良好な一括資料が発見されている。左岸低地帯にある下田遺跡 (37) では吉ヶ谷期の大型住居跡を含む住居跡群が調査されている。下田遺跡の東側台地上にある西浦遺跡 (47) では、住居跡が複数検出されている。

高麗川に合流する小河川の葛川両岸では三福

第１表　周辺の主要遺跡一覧表

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	木曽免遺跡	19	新田前遺跡	37	下田遺跡	55	代正寺遺跡	D	勝呂古墳群
2	小沼堀之内遺跡	20	住吉中学校遺跡	38	足洗遺跡	56	東形遺跡	E	新町古墳群
3	五反田遺跡	21	林際遺跡	39	金井遺跡	57	高坂三番町遺跡	F	新山古墳群
4	北谷遺跡	22	宮町遺跡	40	中耕遺跡	58	高坂二番町遺跡	G	浅羽野古墳群
5	附島遺跡	23	馬場遺跡	41	広面Ｂ遺跡	59	反町遺跡	H	三福寺古墳群
6	塚越渡戸遺跡	24	町東遺跡	42	棚田遺跡	60	銭塚遺跡	I	大河原古墳群
7	別所遺跡	25	柊遺跡	43	桑原遺跡	61	天神原遺跡	J	善能寺古墳群
8	番匠・下道遺跡	26	前原遺跡	44	稲荷前遺跡	62	野本氏館遺跡	K	北峰古墳群
9	御新田遺跡	27	新町遺跡	45	塚の越遺跡	63	西浦遺跡	L	成願寺古墳群
10	牛原遺跡	28	勇福寺遺跡	46	長岡遺跡	64	附川遺跡		
11	在家遺跡	29	相撲場遺跡	47	西浦遺跡	65	雉子山遺跡		
12	景台遺跡	30	宮ノ前遺跡	48	三福寺遺跡	66	観音寺遺跡		
13	上谷遺跡	31	若葉台遺跡	49	大河原遺跡	67	大行山遺跡		
14	登戸遺跡	32	山田遺跡	50	沼端遺跡	68	岩鼻遺跡		
15	渡ヶ関遺跡	33	鶴ヶ岡遺跡	51	駒堀遺跡	69	八幡遺跡		
16	上組遺跡	34	一天狗遺跡	52	根平遺跡	A	牛塚山古墳群		
17	女堀遺跡	35	花影遺跡	53	杉の木遺跡	B	雷電塚古墳群		
18	勝呂遺跡・勝呂廃寺	36	宮裏遺跡	54	大西遺跡	C	下小坂古墳群		

寺遺跡 (48)、大河原遺跡 (49)、沼端遺跡 (50) などにおいて住居跡が確認されており、当該期の集落が毛呂台地上の広範にわたって点在していたことがわかる。

吉ヶ谷式土器の分布の南限とみられる飯能台地東側の小畔川流域では、霞ヶ関遺跡、上組遺跡 (16)、女堀遺跡 (17) などで住居跡が確認されており、比較的小規模な集落が点在していたとみられる。

高坂台地上にも当該期の遺跡は広く分布している。越辺川左岸の駒堀遺跡 (51) では、大型の住居跡を含む住居跡群と方形周溝墓が確認されている。高坂台地北縁部の高坂二番町遺跡 (58)、高坂三番町遺跡 (57) では数十軒の住居跡群と環濠となる可能性もある溝が発見されている。また、やや内陸に位置する根平遺跡 (52) や九十九川沿いの杉の木遺跡 (53) においても住居跡が発見されている。

東松山台地の市ノ川沿いにある観音寺遺跡 (66) では住居跡 8 軒と方形周溝墓 5 基が検出されており、一辺 20 m以上ある 4 号方形周溝墓の埋葬施設内からは銅釧と鉄剣が出土しており特筆される。

古墳時代

古墳時代前期になると、坂戸市域における遺跡数は急増する傾向が看取される。毛呂台地周辺では、台地縁辺の三福寺遺跡や大河原遺跡、長岡遺跡 (46) などで集落が形成される。越辺川低地帯の中耕遺跡 (40) や広面 B 遺跡 (41)、稲荷前遺跡 (44) などでは、大規模な方形周溝墓群が発見されている。なかでも、中耕遺跡と広面 B 遺跡からは前方後方形と考えられる周溝墓が検出されており注目される。

高麗川右岸の坂戸台地でも、台地縁辺に集落が営まれる傾向がある。宮裏遺跡や花影遺跡、勝呂遺跡 (18)、附島遺跡、木曽免遺跡、小畔川右岸の霞ヶ関遺跡などで集落が確認されている。宮裏遺跡や花影遺跡では方形周溝墓が多数検出されており、大規模な墓域が形成されていたとみられる。また坂戸市北東部の台地縁辺部にある五反田遺跡 (3) や木曽免遺跡においても方形周溝墓群が形成される。

古墳時代前期に形成された集落は、中期前半になると衰退し、坂戸市周辺では、毛呂台地上に位置する矢島遺跡や岩殿丘陵東端の駒堀遺跡など限定的になるのが特徴で、坂戸市内では中期前半の遺跡は非常に希薄である。中期後半になると再び集落や古墳が形成されるようになる。

5 世紀後半頃から出現する集落としては、桑原遺跡 (43) や低地に位置する棚田遺跡 (42) が存在するが、短期間で終焉するようであり古代までは続かない。高麗川右岸の坂戸台地では、附島遺跡や上谷遺跡などでも古墳時代前期で途絶えた集落の造営がこの段階から再び開始される。

古墳時代後期になると、集落は増加する傾向にあり、毛呂台地周辺では西浦遺跡や塚の越遺跡 (45)、長岡遺跡、大河原遺跡などの台地縁辺や低地の沼端遺跡などで集落が出現するが、点的に存在するようである。7 世紀に入ると、稲荷前遺跡や足洗遺跡 (38)、金井遺跡 (39)、長岡遺跡を中心に集落が展開し、古代にかけて連綿と続くのが特徴である。下田遺跡も 7 世紀前後から出現する集落であるが、8 世紀前半には終焉するようである。

高麗川右岸の坂戸台地では、上谷遺跡で集落が継続し勝呂遺跡や新田前遺跡 (19)、宮ノ前遺跡 (30) など台地縁辺に集落が展開する傾向にある。

坂戸市内における本格的な古墳の築造は、中期中葉頃から始まる。中期中葉から後半に群集墳の築造が開始されるのは、毛呂台地では三福寺古墳群 (H) や隣接する大河原古墳群 (I)、善能寺古墳群 (J) などがあげられる。近年の調査により、善能寺古墳群からは Bc 種ヨコハケの円筒埴輪が、大河原古墳群では TK208 型式並行の須恵器甕が出土しているため、中期中葉から古墳群の造営が開始されるようである。また、三福寺 1 号墳（入西石塚古墳）では鏡 2 面や横矧板鋲留短甲をはじめとする武具のセット、武器など豊富な副葬品が確認され、当地域に有力者が存在したことが想定される。

坂戸台地では、牛塚山古墳群 (A) や浅羽野古墳群 (G) で古墳の築造が始まるが、毛呂台地に比べ

て古墳数は少ない。大河原古墳群や牛塚山古墳群では中期後半で古墳の築造が停止し、後期には引き継がれないのが特徴である。

埴輪は三福寺古墳群や牛塚山古墳群で出土しているが、大河原古墳群では埴輪の樹立は認められず、古墳群によって異なる様相が認められる。

後期に入ると、毛呂台地では、北峰古墳群 (K) や三福寺古墳群、善能寺古墳群、苦林古墳群で古墳が確認されている。

坂戸台地では、下小坂古墳群 (C) で古墳の築造が継続するほか、雷電塚古墳群 (B)、勝呂古墳群 (D)、新町古墳群 (E) で古墳が築造される。前方後円墳は下小坂古墳群、雷電塚古墳群、新町古墳群で各 1 基ずつ築造されている。

終末期に入ると毛呂台地では、北峰古墳群や善能寺古墳群、苦林古墳群で古墳の築造が継続し、大河原古墳群では中期後半に途絶えた古墳の築造が再開される。また、新たに成願寺古墳群 (L) などで古墳の築造が開始される。坂戸台地では、下小坂古墳群や勝呂古墳群、新町古墳群で引き続き古墳の築造が行われ、新山古墳群 (F) は終末期になってから形成される群集墳である。

また、坂戸市内では馬場遺跡 (23) や町東遺跡 (24) で南北方向に走行する幅約 11 m の道路跡が確認されている。この道路跡は、側溝の特徴や出土遺物などから東山道武蔵路の可能性が非常に高く、ルートは勝呂廃寺 (18) や勝呂神社古墳 (D) の東側を通過するものとみられる。

奈良・平安時代

古代における坂戸市域は、大部分が入間郡と考えられ毛呂台地周辺は麻羽郷に比定されている。また、詳細な施行時期は不明確だが、毛呂台地の北側に広がる低地には入西条里の推定地が広がっている。なお、入間郡 (評) 家は霞ヶ関遺跡とするのが有力である。

坂戸台地では、これまでの台地縁辺部に展開している集落とは別に、空閑地であった台地内陸部に集落が展開していく。坂戸市東部では、住吉中学校遺跡 (20) や林際遺跡 (21)、宮町遺跡 (22) などの東山道武蔵路と密接に関係する新規集落が形成される。坂戸台地のほぼ中央である市の中心部では、若葉台遺跡 (31) を中心として一天狗遺跡や山田遺跡 (32) などのような大規模な集落遺跡群が形成される。若葉台遺跡は、住居跡に対して掘立柱建物跡の比率が高いのが特徴の遺跡であり、四面廂建物や 5 間× 3 間などの長大な掘立柱建物跡が検出されている。また、奈良三彩陶器や銅鈴、円面硯などが出土している点も特筆される。山田遺跡も若葉台遺跡と同様、8 世紀以降に形成される遺跡であり奈良三彩火舎や「片牧」墨書土器などが出土している。

【引用・参考文献】
坂戸市教育委員会　1978 『坂戸市史』原始古代編
坂戸市教育委員会　1992 『坂戸市史』古代史料編
坂戸市教育委員会　1986 『附島遺跡―附島遺跡発掘調査報告書Ⅰ―』
坂戸市教育委員会　1998 『附島遺跡―附島遺跡発掘調査報告書Ⅲ―』
篠田泰輔　2008 『本曽免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 352 集
鈴木孝之　1991 『代正寺・大西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 110 集
朝霞市博物館　2017 『第 32 回企画展「装飾壺からみた弥生時代の朝霞」』

Ⅲ　発見された遺構と遺物

1　遺跡の概要

（1）木曽免遺跡の概要

木曽免遺跡は坂戸台地の東端部に位置し、北と東側には越辺川によって形成された沖積平野が広がる。遺跡全体は比較的平坦な台地上に存在している。遺跡の南側には浅い谷が入り込んでおり、周辺の台地とは切り離されたような地形となっている。また、北西側においても小支谷によって隔たりがあり、遺跡の立地する台地は南東方向へ突き出す半島状を呈している。

木曽免遺跡では、県事業団のものを含めてこれまでに６回の調査が実施されている。以下各調査区について概観する。

１区から３区は道路改良工事に伴うもので、昭和59・60・63年の３次に亘って調査が行われた。

１区では小沼堀之内遺跡側において壺棺墓１基が発見されている。

２区は遺跡の中央部を南北に縦断するような形で調査が実施されており、縄文時代前期（関山・黒浜期）の住居跡６軒と弥生時代中期（宮ノ台期）の住居跡１軒、古墳時代前期の住居跡６軒、平安時代の住居跡１軒が発見された。溝は12条確認されており、このうち２条については弥生時代中期のものとみられる。

２区の南端部から東方向に延びる３区では、縄文時代前期（関山期）の住居跡３軒と古墳時代前期の住居跡10軒、弥生時代の方形周溝墓１基が確認されている。

個人住宅の建設に伴って実施された４区では、弥生時代の方形周溝墓１基と時期不明の掘立柱建物跡１軒が発見された。方形周溝墓は西、南、北側周溝を確認しており、周溝内からは完形の宮ノ台式の壺などが出土している。

農業倉庫の建設に伴い調査を実施した５区では、古墳時代前期の住居跡２軒が発見されている。また、当該調査区の東側は黒色土の堆積する緩傾斜地となっており、縄文時代から平安時代までの遺物包含層が形成されていた。

（2）６区の概要

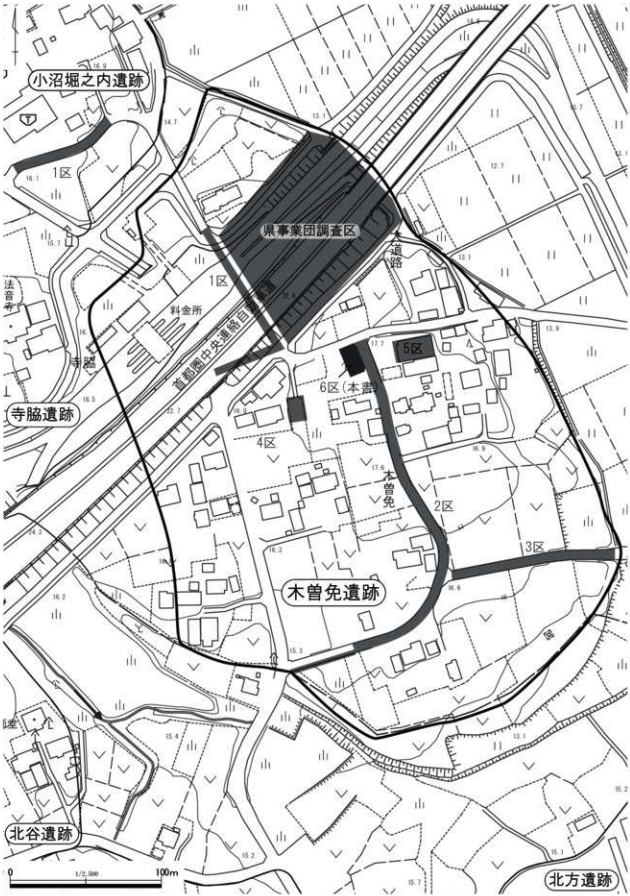
木曽免遺跡６区の調査原因となった個人住宅の開発面積は370㎡であり、調査対象となった面積は318㎡である。調査区は、越辺川の沖積低地に半島状に突き出た台地上のほぼ中央部にあたり、これは木曽免遺跡のほぼ中央部ともいえる。標高は約18ｍを測る。

今回の調査で検出された遺構は、弥生時代中期の方形周溝墓１基、縄文時代前期の竪穴住居跡１軒、弥生時代後期の竪穴住居跡１軒、時期不明の竪穴住居跡１軒、古代とみられる溝１条である。

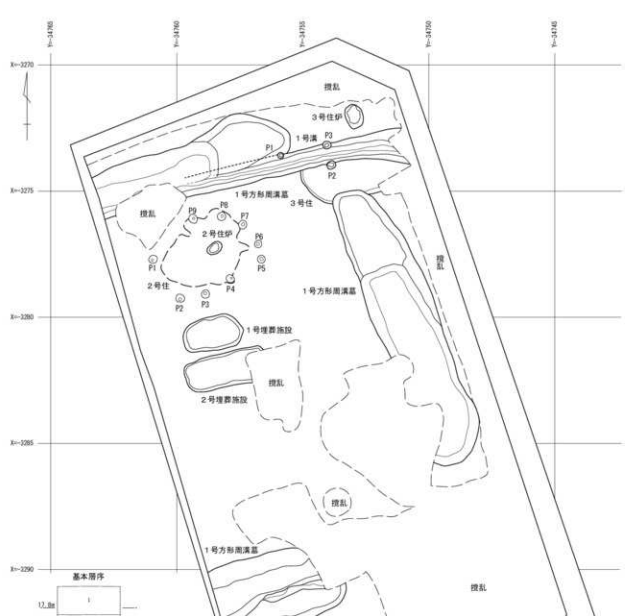
１号方形周溝墓は調査区のほぼ全面に及び、西半部は調査区外へと延びる。周溝は全周せず四隅が切れる種類で、周溝内からは多量の遺物が出土している。周溝に囲まれた方台部は削平されており、盛土は確認できなかったが、周溝墓のほぼ中央には、埋葬施設とみられる楕円形の土坑２基が並んで検出された。土坑内の土層の堆積状況から、埋葬形態は木棺直葬が想定される。

弥生時代後期の１号住居跡は、調査区の南西部に位置し、全体の半分弱が検出された。縄文時代前期の２号住居跡は残存状況が不良であるが、炉跡及び柱穴が確認された。３号住居跡は調査区の北東部で検出され、新旧関係では、１号方形周溝墓に切られている。遺物の出土量はわずかで、時期の判別は難しいが、出土遺物の多くが宮ノ台式段階の遺物であることから、弥生時代中期の可能性も想定される。

１号溝は調査区の北部を東西に走行しており、１号方形周溝墓及び３号住居跡を切っている。調査区内では最も新しい遺構であり、出土遺物から古代のものとみられる。



第３図　木曽免遺跡位置図



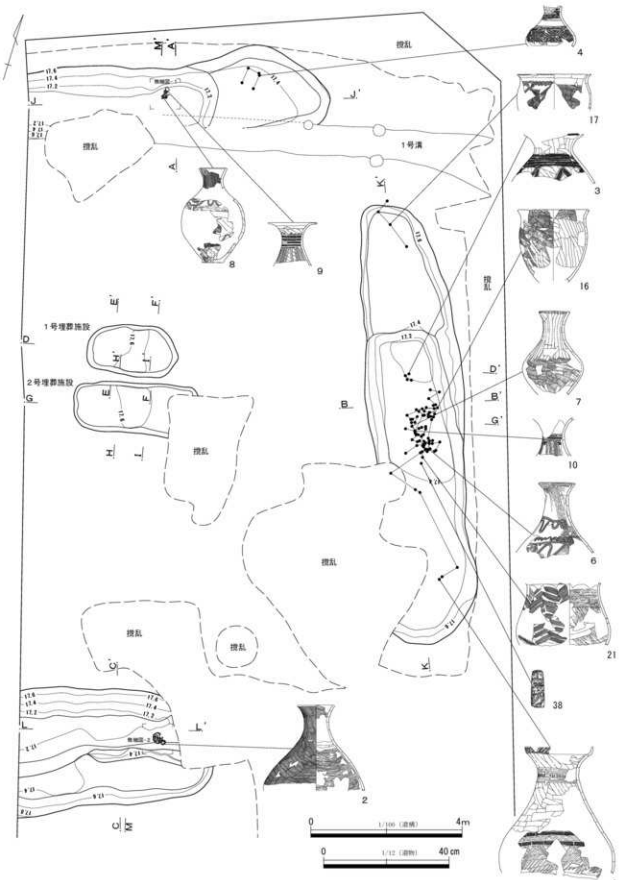
第４図　木曽免遺跡６区全測図

２　方形周溝墓

１号方形周溝墓（第５～16図　図版２～６）

検出範囲は調査区のほぼ全体に及び、東部の約1/2を検出した。西部は調査区外にかかり、四隅が切れる種類の方形周溝墓であると想定される。

２号住居跡、３号住居跡、１号溝と重複し、２・３号住居跡より新しく、１号溝より古い。検出範囲の規模は長軸19.57ｍ、短軸(11.72)ｍを測る。周溝は幅1.63～3.40ｍを測り、断面形状は逆

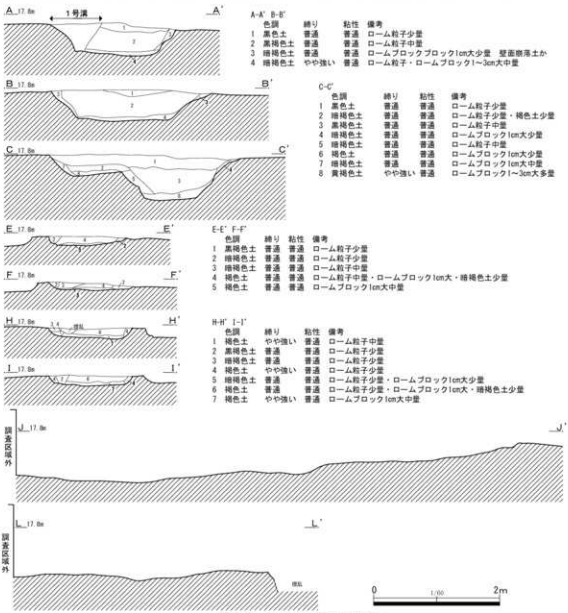


第５図　１号方形周溝墓（１）

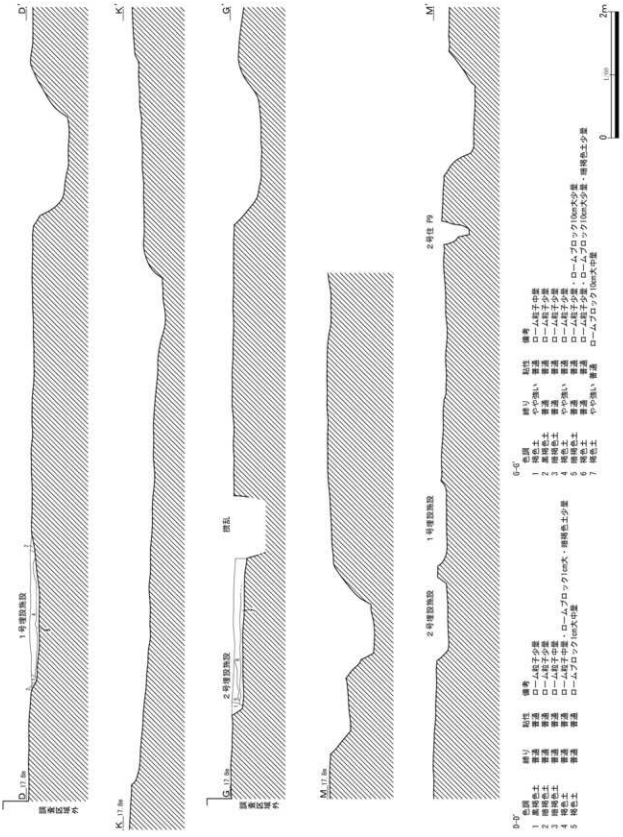
台形状を呈する。深さは 0.24 ～ 0.66 mである。方台部の盛土は削平のため残存していないが、中央付近では、南北に並ぶ形で埋葬施設が２基検出された。１号埋葬施設は長軸長 2.41 m、短軸長 1.33 m、深さ 0.14 mを測る。２号埋葬施設は、１号埋葬施設の南側に隣接して検出され、長軸長 3.25 m、短軸長 1.40 m、深さ 0.24 mを測る。覆土は、四方の壁際で概ね垂直に貫入する土がみられ、これは、板材が朽ちた後に堆積した土と想定される。また、底面付近にはややしまりの強い土が薄く堆積する。以上のことから、２号埋葬施設は木棺直葬と考えられる。なお１号埋葬施設も、覆土の堆積状況や土質が２号埋葬施設と類似することから、木棺直葬の可能性がある。

周溝内の覆土は８層に分層される。遺物は、周溝内から出土した弥生土器壺 27 点（第 13 図１～３、第 14 図４～11、第 15 図 12 ～ 15・22･23、第 16 図 24 ～ 26･29 ～ 35）、甕８点（第 15 図 16 ～ 21、第 16 図 36・37）、台付甕１点（第 16 図 27）、高坏１点（第 16 図 28）、柱状抉入片刃石斧１点（第 16 図 38）を掲載した。遺物の出土は東周溝に集中する。１号・２号埋葬施設からは、縄文土器や弥生土器の小破片が少量出土したのみであり、非掲載とした。

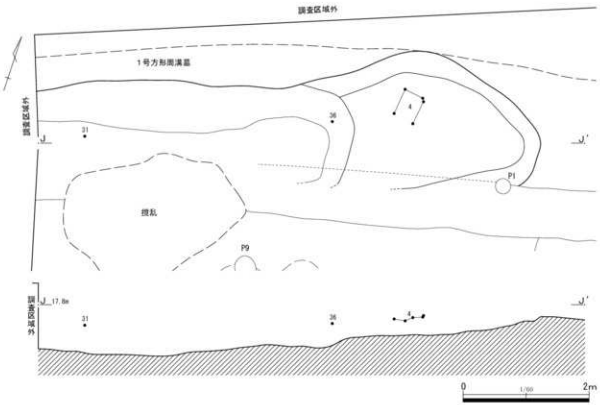
本方形周溝墓の時期は、出土遺物の特徴から、弥生時代中期後半と考えられる。



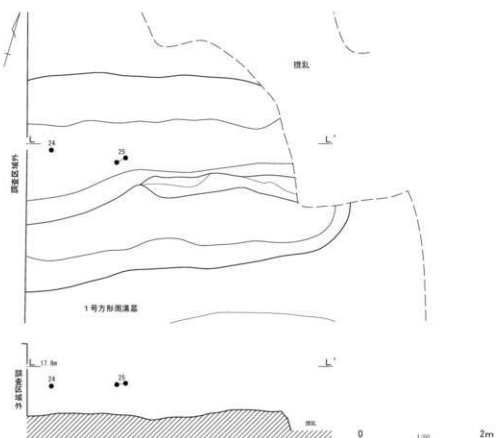
第６図　１号方形周溝墓（２）



第７図　１号方形周溝墓（３）

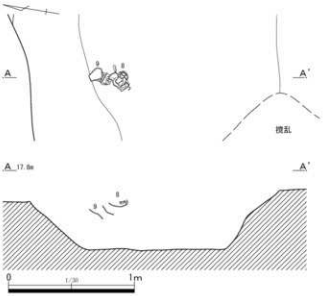


第８図　１号方形周溝墓遺物出土状況（１）

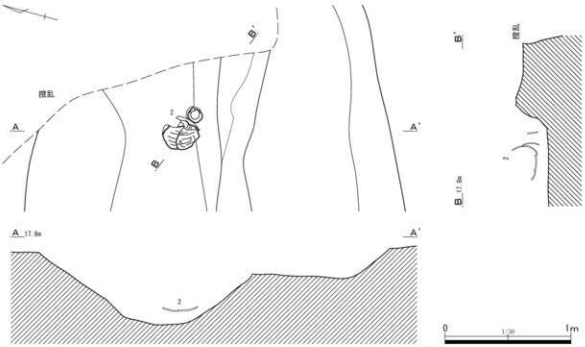


第９図　１号方形周溝墓遺物出土状況（２）

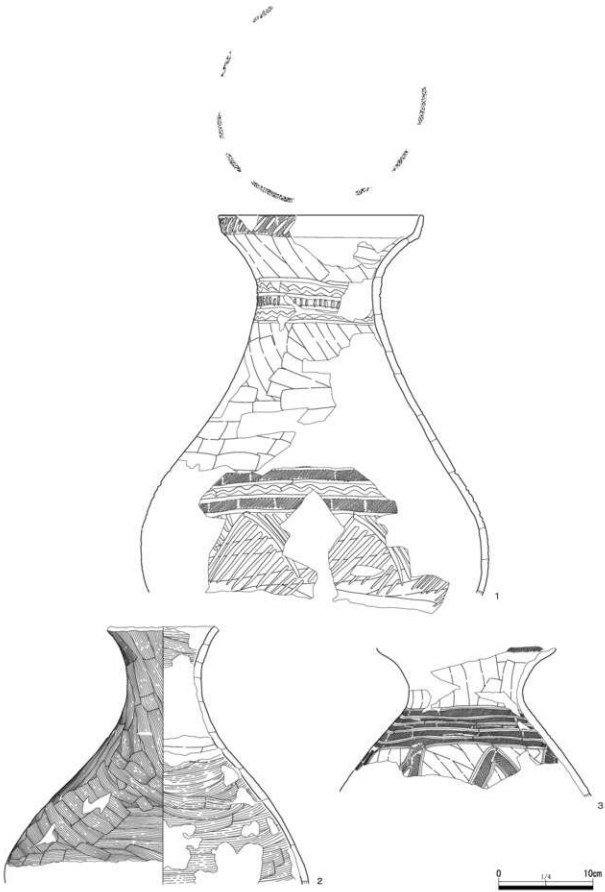
第 10 図　1号方形周溝墓遺物出土状況（3）



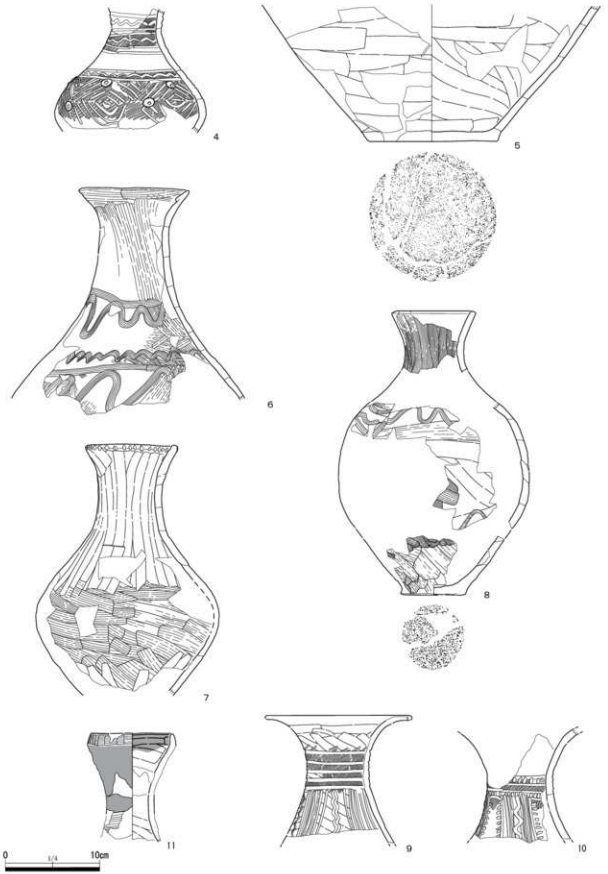
第 11 図　1 号方形周溝墓遺物微細図（1）



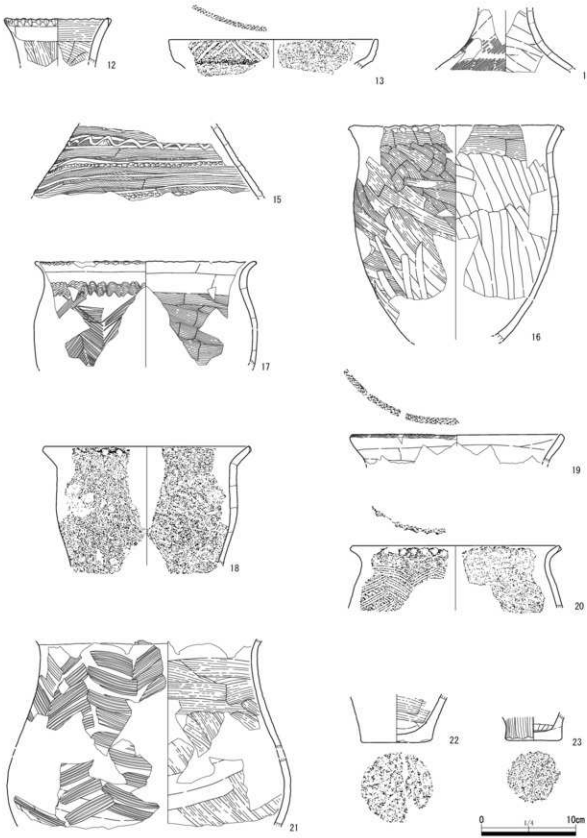
第 12 図　1 号方形周溝墓遺物微細図（2）



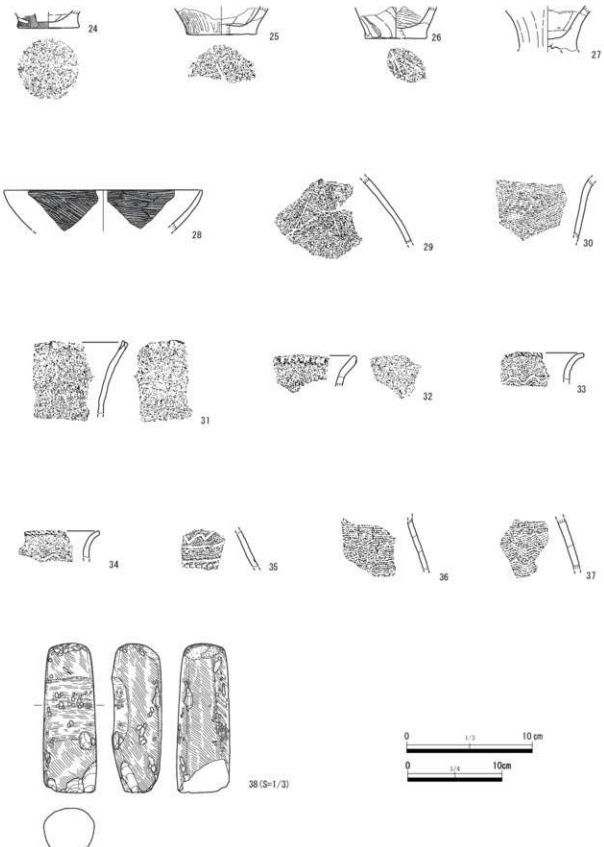
第 13 図　1 号方形周溝墓出土遺物（1）



第 14 図　1号方形周溝墓出土遺物（2）



第 15 図　1 号方形周溝墓出土遺物（3）



第 16 図　1号方形周溝墓出土遺物（4）

第２表　１号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
1	弥生土器 壺	口径 :21.7	石・角・長・凝・チ・針	内面 : にぶい黄橙 外面 : にぶい黄橙	普通	内面 : 木工状工具によるナデ。 外面 : 口唇部 LR 単節縄文施文。口縁部 LR 単節縄文施文後、沈線文施文。頸部横位沈線文４本で３段区画後、沈線間を上段に沈線波状文・中段刺突文・下段沈線波状文を施文。胴部、頸部と同じく４本の沈線文で区画後、上段に LR 単節縄文・中段波状沈線文・下段 LR 単節縄文を施文。この後胴部下位に沈線で山形文を施文。	口縁～胴部 40%	東周溝覆土中層	
2	弥生土器 壺	—	角・石・長・チ・針・凝	内面 : にぶい橙 外面 : にぶい橙	良好	内面 : 横方向のハケ目調整。 外面 : 頸部縦方向、胴部斜方向のハケ目調整。外面胴部黒斑。	口縁～胴部上半 100%	南周溝覆土中層～下層	
3	弥生土器 壺	—	石・長・チ・針・凝	内面 : にぶい黄橙 外面 : にぶい橙	良好	内面 : 器面の剥落が激しく調整不明。 外面 : 口縁部 LR 単節縄文施文。ナデ調整後、上より右から左の順に地紋の LR 単節縄文を施文。胴部上位に２本１単位の横位沈線文と結紐文４単位残存。結紐文のうちひとつは上位の沈線文に接しない。	口縁～胴部上位 65%	東周溝覆土中層	
4	弥生土器 壺	口径 :9.8	石・長・チ・針・凝	内面 : にぶい黄橙 外面 : にぶい黄橙	普通	内面 : 口縁～頸部横方向のナデ。胴部は小円形状の剥離痕跡が顕著。 外面 : 胴部横方向のハケ目調整後、口縁部～頸部と胴部下位を縦方向のナデ。	口縁～胴部 90%	北周溝覆土中層	頸部外面は器面荒れ。胴部外面に黒斑。
5	弥生土器 壺	底径 :13.6	石・長・チ・針・凝	内面 : にぶい橙 外面 : にぶい橙	良好	内面 : 横～斜方向のナデ。 外面 : 横方向のナデ。底部ナデ。	胴部下位～底部 80%	東周溝覆土中層	外面に黒斑。
6	弥生土器 壺	口径 :(11.7)	長・チ・針・凝	内面 : にぶい黄橙 外面 : にぶい黄橙	良好	内面 : 口縁部横方向のハケ目。胴部横方向ナデ後、頸部縦方向のミガキ調整。 外面 : 口縁部横方向のハケ目調整。頸部縦方向のハケ目調整後、縦方向のミガキ。胴部櫛歯状工具による横位区画後、区画内に波状文を二段施文。上段の波状文内に櫛描文を充填する。文様施文後にミガキ調整を施す。	口縁～胴部上位 20%	東周溝覆土中層	内外面に黒斑。
7	弥生土器 壺	—	石・長・チ・凝・角	内面 : にぶい橙 外面 : にぶい橙	良好	内面 : ナデ。 外面 : 頸部 LR 単節縄文施文後、横位沈線文・波状文施文。胴部 LR 単節縄文施文後重菱形文。上位に横位沈線文と波状文、ボタン状貼付文の順で施文。上記の文様施文後に頸部無文部と胴部下位にミガキ調整。	頸～胴部 50%	東周溝覆土中層	外面に黒斑。
8	弥生土器 壺	口径 :(8.9) 底径 :6.9	長・チ・凝	内面 : 灰黄 外面 : にぶい黄橙	良好	内面 : 口縁部横方向のナデの後、縦方向のナデ。胴部・底部は横方向のナデ。 外面 : 口縁部縦方向のハケ目調整。胴部横～斜方向の木口状工具によるナデの後上位と下位に３条１単位の櫛歯状工具による波状文を施文。胴部下位は斜方向の木口状工具によるナデ後、縦方向のハケ目調整。底部はナデ調整。	口縁部片・胴部破片・底部 80%	北周溝覆土上層～中層	口縁部、胴部、底部ともに接点なし。図上復原。
9	弥生土器 壺	—	長・凝・チ・針・角	内面 : にぶい黄橙 外面 : にぶい黄橙	良好	内面 : 口縁部横方向のミガキ調整。頸部以下横方向のナデ調整。 外面 : 口縁部～頸部斜方向のナデ調整後、頸部に文様施文。頸部上位 LR 縄文施文後、横位沈線文を５条施す。その後下位に縦位沈線文と波状文を施文。	口縁～頸部 50%	北周溝覆土上層～中層	内面頸部小円形の剥離痕跡。内面口縁に黒斑。

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
10	弥生土器 壺	—	長・チ・凝・針・角	内面：にぶい黄橙 外面：にぶい黄橙	良好	内面：横方向のミガキ調整。 外面：頸部上位LR単節縄文施文後横位沈線3段、上位2段間に刺突文。頸部下位縦位沈線文施文後、縦位波状沈線文と縦位沈線を施文する。その後沈線文で区画し、区画内に刺突文を施す。上記の文様を施文後に全面にミガキ調整。	頸部 50%	東周溝 覆土上層	内面頸部以下小円形状の剥離痕跡。内外面に黒斑。
11	弥生土器 壺	口径:8.8	石・チ・凝・角	内面：にぶい赤褐 外面：にぶい黄橙	普通	内面：横方向のナデ調整。 外面：口縁部櫛描簾状文を施文。頸部ナデ調整後、下位に櫛描文を施文。内面工縁部と外面頸部以下に赤彩。	口縁～ 頸部 100%	東周溝 覆土中層	図上復原。内外面器面の剥落痕跡が顕著。
12	弥生土器 壺	口径:(11.3)	長・チ・凝	内面：にぶい橙 外面：にぶい橙	良好	内面：木工状工具によるナデ。 外面：口唇部木工状工具によるキザミ。口縁部小工状工具による縦方向のナデ後、上位横方向のナデ。	口縁部 25%	東周溝 覆土中層	
13	弥生土器 壺	口径:(22.1)	石・長・角・チ・針	内面：にぶい黄橙 外面：にぶい黄橙	良好	内面：横方向のナデ。 外面：口唇部LR単節縄文施文。口縁部横方向のナデ後山形文を施文。	口縁部 破片	東周溝 覆土下層	
14	弥生土器 壺	—	片・石・長・輝	内面：橙 外面：橙	普通	内面：斜方向のナデ。 外面：斜方向のナデ後、胴部上位にLR単節縄文を2段施文。一部器面荒れて調整不明瞭。	頸部 25%	東周溝 覆土上層	
15	弥生土器 壺	—	石・長・凝・チ・針・角	内面：にぶい黄褐 外面：にぶい黄橙	良好	内面：斜・縦方向のハケ目調整。 外面：横方向のハケ目調整後、横位櫛描文を施文。櫛描文上・下端に横位沈線文を施文後、沈線文間に横位波状文と刺突文を施す。	胴部上 位 20%	東周溝 覆土下層	
16	弥生土器 甕	口径:(22.4)	長・チ・石・凝	内面：にぶい橙 外面：にぶい橙	良好	内面：口縁部横方向のハケ目調整後、胴部縦方向のナデ調整。 外面：口縁部丸棒状工具によるキザミ。頸部から胴部に木工状工具によるナデ調整。	口縁～ 胴部 20%	東周溝 覆土中層	外面工縁部から胴部に帯状にススが付着。
17	弥生土器 甕	口径:(23.4)	石・長・チ・針・角・凝・	内面：にぶい橙 外面：にぶい橙	良好	内面：胴部横方向のハケ目調整後、口縁部横方向のナデ調整。 外面：口縁部棒状工具によるキザミ。頸部から胴部横方向のナデ調整後、文様施文。胴部に縦位櫛描羽状文を右から左、下から上の順に施文後、頸部に横位櫛描波状文を施す。	口縁～ 胴部上 位破片	東周溝 覆土下層	
18	弥生土器 甕	口径:(22.0)	石・長・チ・凝・針	内面：灰褐 外面：褐灰	普通	内面：口縁部横方向のハケ。胴部横・斜方向の木工状工具によるナデ。 外面：口縁部指頭押圧によるキザミ。胴部上半斜め方向のハケ目後、下半縦方向のナデ。	口縁～ 胴部破 片	東周溝 覆土中層	内外面黒斑。外面胴部に小円形の剥離痕跡。
19	弥生土器 甕	口径:(22.7)	角・白・針・長・凝	内面：にぶい褐 外面：にぶい褐	良好	内面：横方向のナデ。 外面：口唇部LR単節縄文施文。口縁部横方向のナデ。	口縁部 25%	東周溝 覆土中層	
20	弥生土器 甕	口径:(22.4)	角・チ・石・針	内面：褐灰 外面：灰黄褐	良好	内面：口縁部横方向のナデ。胴部横方向のハケ目後ミガキ調整。 外面：口唇部RL単節縄文施文。口縁部横方向の木工状工具によるナデ後、胴部縦位櫛描羽状文を左から右の順で施文。	口縁～ 胴部破 片	覆土	外面胴部にコゲ。
21	弥生土器 甕	—	石・長・凝・チ・白・針	内面：にぶい褐 外面：にぶい橙	良好	内面：横・斜方向のハケ目調整後、頸部横方向のナデ。 外面：ナデ調整後、頸部横位櫛描簾状文。胴部縦位櫛描羽状文を上から下、右から左の順に施文。	胴部上 半 20%	東周溝 覆土中層	図上復原。
22	弥生土器 壺	底径:7.5	石・長・凝・チ	内面：橙 外面：橙	普通	内面：胴部縦方向のナデの後、上位を横方向のハケ目調整。 外面：胴部器面剥落の為調整不明。底部ナデ。	底部 100%	東周溝 覆土中層	

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
23	弥生土器 壺	底径:6.0	石・長・ チ・凝	内面:にぶい黄橙 外面:明赤褐	良好	内面:底部横方向のナデ。 外面:胴部縦方向のハケ目調整。底部多方向のナデ。	底部 100%	東周溝 覆土中層	
24	弥生土器 壺	底径:6.5	石・長・ チ・針・ 凝	内面:にぶい橙 外面:橙	良好	内面:底部横方向のナデ。 外面:胴部縦方向のハケ目調整後、部分的に横方向のナデ。底部多方向のナデ。	底部 100%	南周溝 覆土中層	
25	弥生土器 壺	底径:(7.4)	石・チ・ 長・凝	内面:灰黄褐 外面:にぶい黄橙	良好	内面:底部横方向のナデ。 外面:胴部縦方向のミガキ。底部ナデ。	底部 50%	南周溝 覆土中層	
26	弥生土器 壺	底径:(6.5)	白・長・ チ・凝	内面:灰黄褐 外面:にぶい黄褐	良好	内面:底部横方向のミガキ。 外面:胴部縦方向のナデ。底部網代痕の後ナデ。	底部 25%	東周溝 覆土下層	
27	弥生土器 台付甕	—	石・チ・ 長・凝・ 針	内面:橙 外面:橙	普通	内面:胴部横方向のナデ。 外面:縦方向のナデ。器面摩耗。	接合部 90%	東周溝 覆土中層	内面スス全周。
29	弥生土器 壺	—	石・凝・ チ・針	内面:橙 外面:橙	良好	内面:ナデ。 外面:疑縄文施文後三角連繋文。	胴部 破片	東周溝 覆土中層	
30	弥生土器 壺	—	石・白・ チ・針・ 凝	内面:にぶい黄橙 外面:にぶい黄橙	良好	内面:胴部ハケ目調整後ミガキ。 外面:頸部に櫛描波状文、胴部上位に縦方向の櫛描羽状文を施文。	頸～胴 部破片	東周溝 覆土下層	
31	弥生土器 壺	—	石・長・ 凝・チ	内面:灰黄褐 外面:にぶい褐	良好	内面:口縁部横方向のハケ目調整後、ナデ調整。 外面:口縁部縦方向のハケ目調整後、口唇部指頭押圧。	口縁～ 胴部破 片	北周溝 覆土中層	外面黒斑。
32	弥生土器 壺	—	石・長・ チ・凝	内面:橙 外面:にぶい橙	良好	内面:口縁部横方向の木口状工具によるナデ調整。 外面:口唇部棒状工具によるキザミ。口縁部縦方向のハケ調整。	口縁部 破片	東周溝 覆土中層	内外面黒斑。
33	弥生土器 壺	—	石・白・ 凝	内面:にぶい橙 外面:にぶい橙	良好	内面:口縁部横方向のミガキ調整。 外面:口唇部 RL 単節縄文施文。口縁部横方向のナデ調整後、櫛描波状文を施文。	口縁部 破片	東周溝 覆土下層	口縁部に焦げ。
34	弥生土器 壺	—	石・長・ 白・凝	内面:明赤褐 外面:明赤褐	良好	内面:口縁部横方向のハケ目調整後、横方向のミガキ調整。 外面:口唇部 RL 単節縄文施文。口縁部横方向のナデ調整後、櫛描波状文と縦位櫛描文を施文。	口縁部 破片	東周溝 覆土中層	口縁部に焦げ。
35	弥生土器 壺	—	角・長・ チ・針・ 石・凝	内面:にぶい黄褐 外面:暗灰	良好	内面:ハケ目調整。 外面:斜方向のハケ目調整後、横位櫛描文を施文。櫛描文の上下を横位沈線文で区画。区画の上位には沈線波状文、下位に刺突文を施す。	胴部 破片	東周溝 覆土下層	外面黒斑。
36	弥生土器 甕	—	石・長・ チ・角・ 針・凝	内面:にぶい黄橙 外面:橙	良好	内面:指頭押圧後ハケ目調整後ナデ調整。 外面:櫛描簾状文１段、櫛描波状文を２～３段施文。	胴部 破片	北周溝 覆土中層	外面黒斑。
37	弥生土器 甕	—	角・長・ チ・針・ 凝	内面:明赤褐 外面:明褐	普通	内面:ハケ目調整後、ナデ調整。 外面:ハケ目調整後、文様施文。櫛描簾状文１段後、下位に櫛描波状文を３段以上、下から上の順に施文。	胴部 破片	覆土	
38	柱状抉入 片刃石斧	長:残11.95 幅:4.25 厚:4.0 重:366.16	—	—	—	石材：頁岩 柱状礫を素材とする。中央部に敲打を施し抉入部を作出し、全体的に研磨し成形する。基部に使用痕とみられる敲打痕あり。	90%	東周溝 覆土中層	

3　竪穴住居跡

1号住居跡（第17・18図　図版3・6）

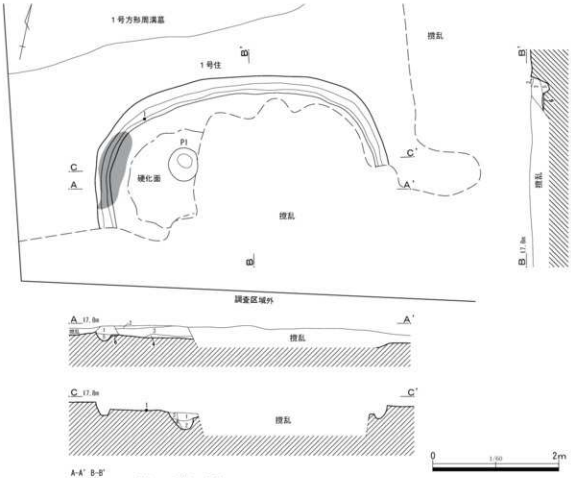
調査区の南西部に所在し、北側に1号方形周溝墓が位置する。他遺構との重複関係は認められない。平面形状は、南側の1/2以上が攪乱を受けているため不明であるが、検出範囲では楕円形を呈する可能性がある。規模は長軸4.65 m、短軸(2.23) mで、深さは0.19 mを測る。

覆土は6層に分層される。床面は壁際から中央に向かって僅かに低くなるとみられ、西側で硬化面が検出された。また、壁に沿って壁溝があり、検出範囲では全周する。壁溝は幅0.20～0.35 m、深さ0.1 mを測り、断面形状は逆台形である。貼床はほぼなく、部分的に検出されたのみである。

柱穴は1基（P 1）検出された。規模は長軸0.52 m、短軸0.46 m、深さ0.27 mを測る。

遺物の出土は少なく、弥生土器の甕2点（第18図1・2）を掲載した。1は覆土下層から、2は覆土からそれぞれ出土した。

本住居跡の時期は、出土遺物の特徴から弥生時代後期と考えられる。



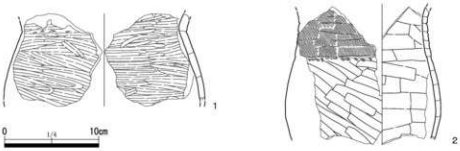
A-A' B-B'

	色調	締り	粘性	備考
1	暗褐色土	普通	普通	焼土粒子・焼土ブロック5cm大多量
2	暗褐色土	普通	普通	ローム粒子少量
3	黒褐色土	普通	普通	ローム粒子少量
4	暗褐色土	やや強い	普通	ローム粒子少量・ロームブロック1cm大少量
5	暗褐色土	普通	普通	ローム粒子中量　壁溝覆土
6	褐色土	普通	普通	ローム粒子中量・ロームブロック1cm大中量　貼床

C-C'

	色調	締り	粘性	備考
1	黒色土	普通	普通	ローム粒子少量
2	暗褐色土	普通	普通	ローム粒子中量
3	黒褐色土	やや強い	普通	ローム粒子中量
4	褐色土	やや強い	普通	ロームブロック1cm大中量

第17図　1号住居跡



第 18 図　1 号住居跡出土遺物

第 3 表　1 号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
1	弥生土器 甕	—	石・長・凝・チ・角	内面：にぶい黄橙 外面：にぶい黄橙	普通	内面：横方向のハケ目後、横方向のミガキ調整。 外面：横方向のハケ目後、横方向のミガキ調整。	頸～胴部破片	覆土下層	外面口縁部に黒斑。
2	弥生土器 甕	—	石・長・チ・凝	内面：にぶい黄橙 外面：にぶい黄橙	普通	内面：横方向のナデ。 外面：胴部上半 縄、単節縄文施文。胴部下半木工具による斜方向のナデ調整。	胴部 20%	覆土	内面胴部下位にスス付着。

2 号住居跡（第 19 ～ 21 図　図版 3）

調査区の北西部に所在し、北側に 1 号溝が位置する。1 号方形周溝墓と重複し、本住居跡が古い。検出範囲では不整形状の掘り込みや柱穴として残存していた。規模は長軸（P 1 － P 6 間の心々距離）が（4.24）m、短軸（P 3 － P 9 間の心々距離）が（3.01）m で、深さは 0.14 m を測る。

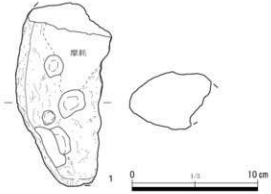
覆土は 2 層に分層される。床面はほぼ平坦で、硬化面は認められない。

炉は中央東寄りで 1 基検出された。掘り込みが認められ、覆上上層からは炉で使用された可能性のある多孔石（第 19 図 1）が 1 点出土している。規模は長軸（北東－南西）0.63 m、短軸（北西－南東）0.41 m で、深さは 0.1 m を測る。

柱穴は 9 基（P 1 ～ 9）検出された。規模は P 1 が長軸 0.34m、短軸 0.32 m、深さ 0.38 m、P 2 が長軸 0.34 m、短軸 0.31 m、深さ 0.32 m、P 3 が長軸 0.33 m、短軸 0.31 m、深さ 0.41 m、P 4 が長軸 0.33 m、短軸 0.29 m、深さ 0.25 m、P 5 が径 0.31 m、深さ 0.31 m、P 6 が長軸 0.30 m、短軸 0.27 m、深さ 0.25 m、P 7 が長軸 0.34 m、短軸 0.32 m、深さ 0.23 m、P 8 が長軸 0.34 m、短軸 0.32 m、深さ 0.44 m、P 9 が長軸 0.37 m、短軸 0.32 m、深さ 0.41 m を測る。

遺物は炉の覆土上層から出土した多孔石 1 点（第 19 図 1）を掲載した。このほか、非掲載遺物として縄文時代前期黒浜式の土器破片が少量出土している。

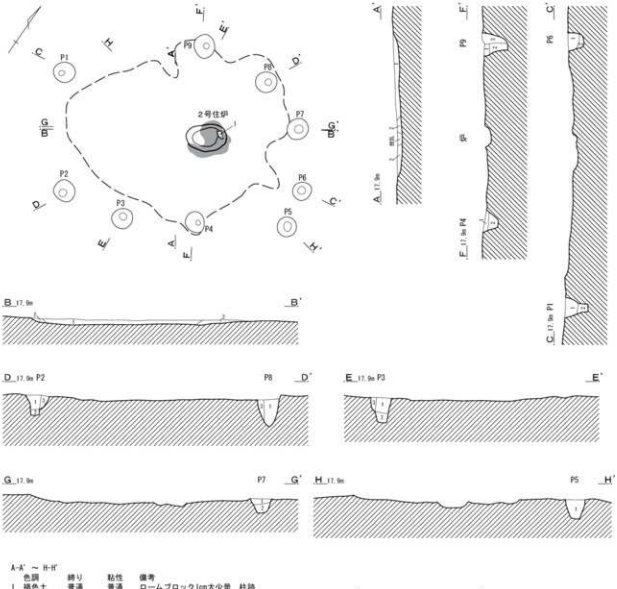
本住居跡の時期は、出土遺物の特徴から縄文時代前期と考えられる。



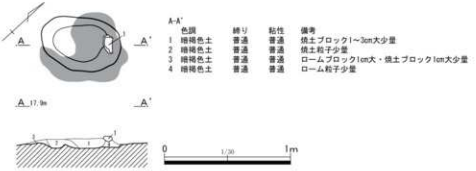
第 19 図　2 号住居跡出土遺物

第 4 表　2 号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
1	多孔石	長：残 14.64 幅：残 7.68 厚：4.6 重：618.18	—	—	—	石材：緑色片岩 大型の板状礫を素材とする。表面に摩耗痕と凹み穴が認められる。裏面は全体的に摩耗しているが、明確な使用痕は認められない。	100%	覆土	



第20図　2号住居跡



第21図　2号住居跡炉

3号住居跡（第22～24図　図版3・6）

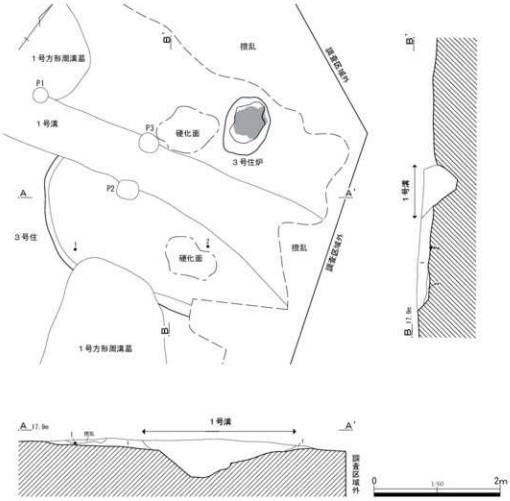
調査区の北東部に所在する。1号溝、1号方形周溝墓と重複し、本住居跡が最も古い。攪乱や1号溝、1号方形周溝墓によって削平されているため、平面形状は不明である。規模は長軸(4.45)m、短軸（3.33）mで、深さは0.23 mを測る。

覆土は2層に分層される。床面には僅かな起伏がみられ、北西側と南東側の2カ所で部分的に硬化面が認められる。

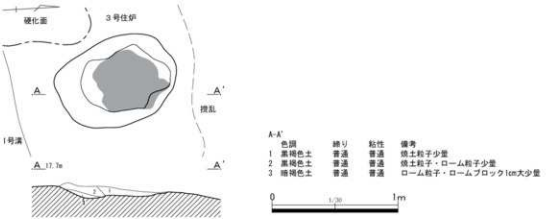
炉は北寄りで1基検出された。掘り込みが認められ、規模は長軸（北－南）0.96 m、短軸（東－西）0.71 mで、深さは0.18 mを測る。

遺物は少なく、覆土下層から出土した敲石2点（第24図1・2）を掲載した。また、非掲載の遺物は弥生時代中期後半宮ノ台式の土器破片が多くを占めるほか、縄文時代前期黒浜式の土器破片が少量出土している。

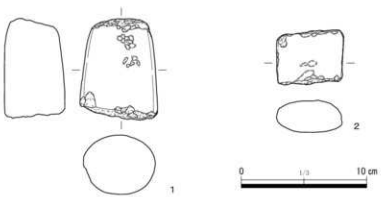
本住居跡の時期は、遺物が少ないため明らかでない。ただし、出土遺物の多くが宮ノ台式の土器であるため、弥生時代中期後半に帰属する可能性がある。



第22図　3号住居跡



第 23 図　３号住居跡炉



第 24 図　３号住居跡出土遺物

第５表　３号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
1	敲石	長:4.4 幅:5.4 厚:2.55 重:111.49	—	—	—	石材：閃緑岩 表・裏面に顕著な摩耗痕が認められ、中央部に浅い凹み穴あり。両側縁中央部に敲打痕が顕著。上・下端部には欠損後とみられる敲打痕あり。	100%	覆土下層	
2	敲石	長:8.1 幅:5.2 厚:4.8 重:412.81	—	—	—	石材：閃緑岩 全体的に顕著な摩耗痕が認められ、上・下端部に敲打痕・摩耗痕あり。明瞭な擦痕は見られない。	100%	覆土下層	磨製石斧を転用か。

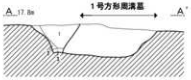
4　溝

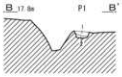
1号溝（第 25 図　図版３）

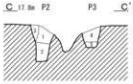
調査区の北部に位置し、N－77°－E を軸として北東－南西方向に走行する。１号方形周溝墓、３号住居跡と重複し、本溝が最も新しい。検出長 11.84 m、幅 0.77 ～ 1.36 m、深さ 0.54 m を測り、断面形状は薬研状である。

覆土は３層に分層される。本溝に伴うピットとして３基（Ｐ１～３）が検出された。検出された規模はＰ１が径 0.24 m、深さ 0.11 m、Ｐ２が長軸 0.31 m、短軸 0.29 m、深さ 0.58 m、Ｐ３が長軸 0.35 m、短軸 0.30 m、深さ 0.34 m を測る。遺物は、１号方形周溝墓からの流れ込みと考えられる弥生土器のほか、須恵器の小破片が出土しており、遺構の時期を示すと考えられる。

本溝の時期は、出土遺物の特徴から古代と考えられる。







A-A'

	色調	締り	粘性	備考
1	黒色土	普通	普通	ローム粒子・暗褐色土少量
2	暗褐色土	普通	普通	ローム粒子中量
3	黒褐色土	普通	普通	ローム粒子・ロームブロック1cm大少量

B-B'

	色調	締り	粘性	備考
1	暗褐色土	普通	普通	ローム粒子中量・ロームブロック1cm大少量
2	褐色土	普通	普通	ローム粒子少量

C-C'

	色調	締り	粘性	備考
1	暗褐色土	普通	普通	ローム粒子少量
2	黒褐色土	普通	普通	ロームブロック1cm大中量
3	暗褐色土	普通	普通	ローム粒子・ロームブロック1cm大中量
4	暗褐色土	普通	普通	ローム粒子少量
5	暗褐色土	普通	普通	ロームブロック1cm大中量

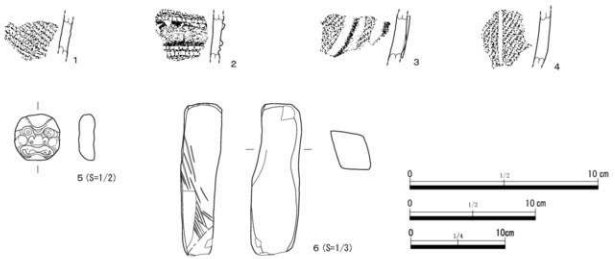
0 1:60 2m

第25図　1号溝

5　遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物として、縄文土器４点（第26図１～４）と土製品１点（第26図５）、石製品１点（第26図６）を掲載した。

１～４は縄文土器深鉢の小破片である。１は胴部破片で、単節RL縄文が施される。２は胴部破片で、胴部文様帯を横位隆帯で区画し、隆帯間に弧状の沈線を施している。また、横位隆帯脇に丸棒状工具による角押文が複列で施される。３は胴部破片で、縦位弧状隆帯貼り付け後ＲＬ単節縄文を施文し、隆帯脇に幅広の沈線文を施している。４はＲＬ単節縄文施文後、丸棒状工具による縦位沈線文を施している。時期は１が縄文前期初頭～中葉、２が阿玉台Ｉｂ式期、３・４が加曾利Ｅ３式期と考えられる。５は土製品の泥メンコで、型造成形されている。時期は近世と考えられる。６は石製品の砥石で、上面と側面に刀痕跡がみられ、下面以外は全面研磨されている。時期は不明である。



第26図　遺構外出土遺物

第６表　遺構外出土遺物観察表

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
1	縄文土器 深鉢	—	長・チ・ 繊維	内面：にぶい黄橙 外面：灰黄褐	普通	内面：ナデ。 外面：単節RL縄文(0段多条)施文。	胴部 破片	—	縄文前期初 頭～中葉
2	縄文土器 深鉢	—	片・チ・ 凝・石・ 長	内面：橙 外面：にぶい橙	普通	内面：ミガキ調整。 外面：胴部文様帯を横位隆帯で区画、隆帯間に弧状の沈線を施す。横位隆帯脇に丸棒状工具による角押文を複列施文。	胴部 破片	—	阿玉台 １ｂ式
3	縄文土器 深鉢	—	石・長・ チ	内面：にぶい黄橙 外面：浅黄	普通	内面：ミガキ調整。 外面：縦位弧状隆帯貼り付け後RL単節縄文を施文、隆帯脇に幅広の沈線文を施す。	胴部 破片	—	加曾利 Ｅ３式
4	縄文土器 深鉢	—	長・チ・ 角・凝	内面：橙 外面：橙	普通	内面：ミガキ調整。 外面:RL単節縄文施文後、丸棒状工具による縦位沈線文。	胴部 破片	—	加曾利 Ｅ３式
5	土製品 泥メンコ	長:2.5 短:2.4 厚:0.8 重:4.89	石・角	橙	良好	型造成形。裏面は指頭押圧。	100%	—	
6	石製品 砥石	長:12.0 幅:4.9 厚:3.1 重:215.75	—	—	—	石材：凝灰岩 上面と側面に刃痕跡あり。下面以外全面研磨される。	100%	—	

Ⅳ　総括

本書では、木曽免遺跡にて実施された６区の発掘調査成果を報告した。今回の調査では、弥生時代中期の墓域が調査対象となり方形周溝墓の発見をはじめ、縄文時代前期から古代に至るまでの複数の遺構が確認された。遺物については弥生時代中期の遺物が出土し、当地域の弥生時代を考える上での良好な一括資料を得ることができた。

（１）木曽免遺跡における弥生土器について

ここでは１号方形周溝墓の出土土器について触れ、これまで報告されている木曽免遺跡内における位置付けを考えていく。

出土土器は大きく宮ノ台式と中部高地系に分けられる。まず壺型土器（以下壺と称する）から概観していく[注1]。１は中部高地系の壺である。頸部の文様は多段化し、胴部上半は無文帯、胴部下位にまで文様が施されている。口縁部が大きく頸部の太い器形は栗林式では見られず、在地化したものだと考える。４はボタン状貼付文や横位文様を施文し中部高地系であるが、胴部中位の文様は、妻沼低地系の土器に出自を見出せるのではないだろうか[注2]。９・10に関しては、頸部に縦位の文様が施文されている。15は横位の櫛描文を沈線文で区画し、山形文と刺突列点文を多段に施文している。これらの壺は栗林２式に比定される。

２・３の壺は宮ノ台式である。特に３の結紐文は宮ノ台式の代表的な文様である。６・８は櫛描波状文が施文される。８は、胴部下位にまで文様が及んでいる。７は口縁部のキザミのみ以外は無文、11は赤彩を施している。12は口縁部のみだが、７と同様の壺だろう。

29は磨り消し縄文技法を用い三角文を施文している。これは、妻沼低地系と称される北島式に該当すると思われる。

１号方形周溝墓は、全体の規模が19.5ｍを測り、ほぼ中央部からは埋葬施設とみられる土坑２基を検出した。土坑の土層観察状況から、埋葬形態は木棺直葬であったとみられるが副葬品等の発見には至らなかった。本方形周溝墓の周溝内からは多数の弥生土器が出土しており、年代は弥生時代中期後半に位置づけられる。

次に甕型土器（以下甕と称する）である。16・18・31・32は宮ノ台式にあたる。口縁部にキザミや押捺の加飾を施す以外は無文である。17・19・20・21・30・33・34は中部高地系である。口縁部に押捺や縄文を施文し、胴部にも文様を有している。特に、胴部の縦位羽状文は右起点型で施文しており、中部高地系の施文方法を遵守している。

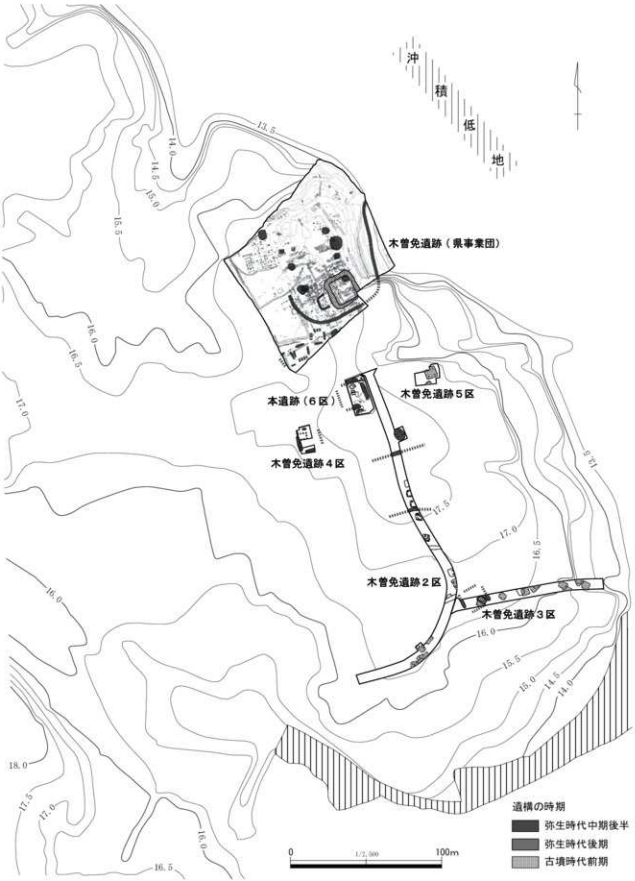
以上を鑑みて、既存資料との検討を行う。2008年報告（篠田 2008）ではSJ01[注3]を最古段階とし、環濠であるSD42・他の住居跡・方形周溝墓が続くことがわかっている。SJ01は中部高地系が主体で宮ノ台式が客体的となり、妻沼低地系も含まれていた。後続する住居跡は宮ノ台式が主体となり、中部高地系の数は少なくなっている。また３基検出されている方形周溝墓のうちSR01・SR02は図示された遺物はなく、SR03の壺１点は宮ノ台式に属するだろう。

本報告の１号方形周溝墓は中部高地系と宮ノ台式が偏りなく共伴しており、特徴的である。宮ノ台式が共伴していることからSJ01よりは新しい。中部高地系が伴っていることからはSR03より古いと考えられる。よって、本方形周溝墓は、現在報告されている木曽免遺跡における方形周溝墓の中で最古段階に位置付けられよう。

（２）　木曽免遺跡における各時代の景観について

本項では６区の調査で確認された遺構と過去の調査成果を加味し、弥生時代から古墳時代における木曽免遺跡全体の景観についてまとめていきたい。

木曽免遺跡のある台地は、東側に越辺川の沖積平野を臨み、南北には小支谷を挟んでいること



第 27 図　木曽免遺跡における弥生時代から古墳時代の遺構分布
（篠田 2008『木曽免遺跡』の第 164 図を引用・加筆）

から、周囲の台地からやや独立した半島状を呈している。

第27図は既存調査成果をもとに、弥生時代中期後半から古墳時代前期までの遺構の分布状況を地形図に合成したものである。

木曽免遺跡では、越辺川の沖積地を臨む台地の縁辺部に縄文時代前期（黒浜・関山期）の集落が形成されて以降、しばらくの間は活動が低調な状態が続く。再び活動の痕跡が顕著に確認されるようになるのは、弥生時代中期になってからである。

弥生時代中期における遺構の分布状況を見ると、台地の北東側に形成された集落域と、環濠外の南北に展開する墓域が環濠を境に明確に区分されている。

弥生時代中期後半の住居跡群は、越辺川低地帯を東に臨む台地の北東部に形成されている。当該期の住居跡が県事業団の調査によって11軒、市が調査を実施した2区において1軒が発見されている。周囲には西側が開口するような形で環濠（SD13、SD42）が巡らされており、このエリアを一つの環濠集落としてとらえられる。なお、環濠の北辺は確認されていないが、住居跡群の北側には、小沼堀之内遺跡のある台地と境界になるように小支谷が深く入り込んでいる。この小支谷付近が集落の北限であるとともに、環濠の北辺になるとみられる。また、環濠外の南側でも少数ではあるが住居跡2軒が確認されている。これらは遺物による詳細な検討から環濠や環濠内の住居跡群に比べ古相を示すとされ、このことから、環濠に先行して集落が形成されていたと想定される（篠田2008）。

墓域は、環濠外の南北2か所に形成されている。南側は方形周溝墓を主体とし、これまでに5基が確認されている。北側では調査事例が少ないが、壺棺墓1基が検出されている。

既存の調査成果からみると、6区1号方形周溝墓は墓域の南側に位置している。環濠外の南側至近において発見されている方形周溝墓は、いずれも規模が10m級で構成される。一方、4区1号方形周溝墓や6区1号方形周溝墓は、環濠から若干離れており、規模は15～20m級とやや大型である。そのため、6区1号方形周溝墓は、木曽免遺跡において現段階で確認されている方形周溝墓では最大規模にして最古段階となる[注4]。

そのほかの遺構として、墓域南側で中期後半の遺物を主体的に出土する溝2条が発見されており、環濠の可能性も考えられる。しかし、遺構の検出範囲が狭小のため詳細については不明である。

次に弥生時代後期の遺構分布状況をみると、中期後半に環濠集落が形成された台地の北東部では住居跡等が見られなくなる。後期吉ヶ谷段階の住居跡としては本調査区の1号住居跡がこれに該当するが、当該期遺構の発見例が乏しく、遺跡全体の様相は不明である。

木曽免遺跡の北側に位置する島状の独立した台地上には、同じく弥生時代中期後半の集落遺跡である附島遺跡が存在する。類似したケースは、東松山市の早俣低地に半島状に突き出た高坂台地上でもみられ、代正寺遺跡、大西遺跡などがこれに該当する。以上のように荒川（旧入間川）右岸流域では、沖積低地に突き出す台地上に中小規模の集落が点々と形成されていた様子が明らかとなっており、比企入間地域の当該期集落立地にみられる特色の一つと言えよう。

続く古墳時代前期は、遺構数が増加し、台地上における土地利用にも変化がみられる。

集落域は、2区と3区を中心に、台地の南東側と東側で発見されており、弥生時代に比べ、住居跡群が広範囲に展開している。

その一方で、弥生時代中期後半に集落が営まれていた台地北東部には、方形周溝墓を主体とした墓域が形成される。県事業団の調査で方形周溝墓2基（SR04、SR05）が発見されており、このうちSR04は規模が約21mと比較的大型である。また、SR04とSR05は近接しており、周溝を一部共有している。

古墳時代前期の墓域は、弥生時代中期後半段階に形成された方形周溝墓群の北側に位置していることから、環濠集落の衰退後、空閑地となっていた台地北東側を、新たな墓域として利用した様子

が推察できる。

以上、雑駁ではあるが各段階における木曽免遺跡全体の景観について概観した。今回の調査では弥生時代中期後半段階における当台地上の墓域の一端を明らかにすることができた。本遺跡の各時代の様相については、徐々に明らかとなってきたが、遺跡の西側をはじめ調査事例がないエリアも多く残る。今後もさらに成果を蓄積することで、遺跡の全体像の解明に努めていきたい。

註１　遺物番号は第 13 ～ 16 図に対応している。
註２　妻沼低地系でも中期前半の池上式の文様が祖型となっていると考える。
註３　遺構名の表記について区別を図るために、県事業団調査によって検出された遺構にはアルファベットと数字での表記を用いた。
註４　４区１号方形周溝墓は未報告だが、出土遺物から宮ノ台式と判断した。一部の出土遺物は『埼玉考古学会シンポジウム「北島遺跡土器」とその時代』(埼玉県考古学会 2003) に掲載されている。

【引用・参考文献】

安藤広道　1996 「南関東地方（中期後半・後期）」『YAY！(やいっ！)』弥生土器を語る会 20 回到達記念論文集
埼玉県考古学会　2003 『埼玉考古学会シンポジウム「北島式土器」とその時代－弥生時代の新展開－』埼玉考古別冊 7
埼玉弥生土器観会　2007 『埼玉の弥生時代』
埼玉弥生土器観会　2013 『シンポジウム　熊谷市前中西遺跡を語る－弥生時代の大規模集落－』発表要旨資料集
坂戸市教育委員会　1978 『坂戸市史』原始古代編
坂戸市教育委員会　1992 『坂戸市史』古代史料編
篠田泰輔　2008 『木曽免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 352 集
鈴木孝之　1991 『代正寺・大西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 110 集
馬場伸一郎　2008 「弥生中期・栗林式土器編年の再構築と分布論的研究－弥生貿易論の可能性を視野に入れて－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 145 集

写 真 図 版

１　調査区遠景

２　調査区全景

１　１号方形周溝墓　東周溝

２　１号方形周溝墓　南周溝

３　１号方形周溝墓　北周溝

４　１号方形周溝墓　東周溝遺物出土状況

５　１号方形周溝墓　南周溝遺物出土状況

６　１号方形周溝墓　北周溝遺物出土状況

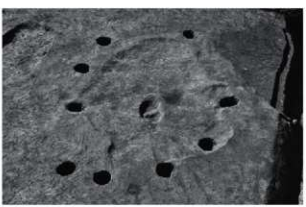
７　１号埋葬施設・２号埋葬施設

８　１号埋葬施設　Ｅ・Ｆライン土層断面

１　２号埋葬施設　Ｈ・Ｉライン土層断面

２　１号方形周溝墓　Ｃライン土層断面

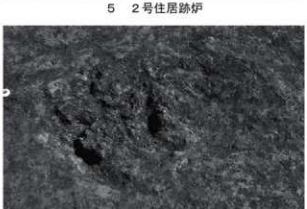
３　１号住居跡



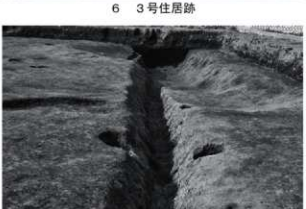
４　２号住居跡

５　２号住居跡炉

６　３号住居跡



７　３号住居跡炉



８　１号溝

1　1号方形周溝墓　第13図1

2　1号方形周溝墓　第13図2

3　1号方形周溝墓　第13図3

4　1号方形周溝墓　第14図4

5　1号方形周溝墓　第14図5

6　1号方形周溝墓　第14図6

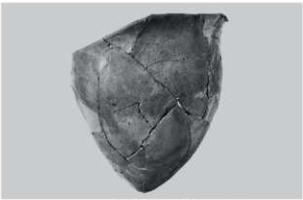
7　1号方形周溝墓　第14図7

1　1号方形周溝墓　第 14 図９

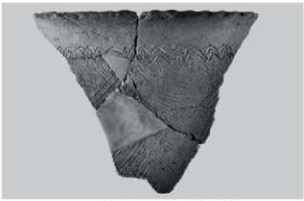
2　1号方形周溝墓　第 14 図 10

3　1号方形周溝墓　第 14 図 11

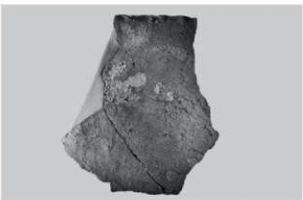
4　1号方形周溝墓　第 15 図 15



5　1号方形周溝墓　第 15 図 16



6　1号方形周溝墓　第 15 図 17



7　1号方形周溝墓　第 15 図 18

8　1号方形周溝墓　第 15 図 13・20

1　１号方形周溝墓　第 16 図 38

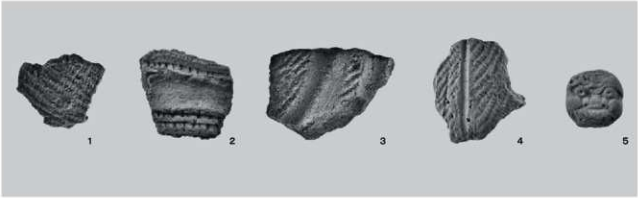
2　１号住居跡　第 18 図１

3　１号住居跡　第 18 図２

4　３号住居跡　第 24 図１

5　３号住居跡　第 24 図２

6　遺構外出土遺物　第 26 図６



7　遺構外出土遺物　第 26 図１～５

報 告 書 抄 録

ふりがな	きそめんいせきろくく
書名	木曽免遺跡6区
副書名	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	山本良太・春里桃子・宮本久子
編集機関	有限会社毛野考古学研究所
編集機関所在地	〒379-2146　群馬県前橋市公田町 1002 番地 1　　TEL 027-265-1804
発行機関	埼玉県坂戸市教育委員会
発行機関所在地	〒350-0292　埼玉県坂戸市千代田一丁目 1 番 1 号　TEL 049-283-1331
発行年月日	2021 年（令和3年）3月 26 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
木曽免遺跡6区	さいたまけんさかどし 埼玉県坂戸市 ちいちがたかわさき 大字小沼地内	11239	27-039	35° 58′ 11″	139° 26′ 52″	2014.9.30 ～ 11.6	318㎡	記録保存

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
木曽免遺跡6区	集落・墓域	縄文時代前期 弥生時代中期 弥生時代後期 時期不明 古代	竪穴住居跡 方形周溝墓 竪穴住居跡 竪穴住居跡 溝	1 軒 1 基 1 軒 1 軒 1 条	縄文土器深鉢・弥生土器壺・甕・台付甕・高坏・柱状抉入片刃石斧・多孔石・敲石・砥石・土製品	

要　約	木曽免遺跡は、越辺川によって形成された沖積平野を望む坂戸台地の東縁辺に立地し、現在までに県事業団や市教育委員会により 7 回の調査が行われている。このうち本書は、平成 26 年に実施された木曽免遺跡 6 区の発掘調査成果の報告である。本遺跡では、縄文時代前期及び弥生時代中期～後期、古代の遺構が確認され、弥生時代中期後半の方形周溝墓 1 基（1 号方形周溝墓）が検出された点が特筆される。1 号方形周溝墓からは、中部高地系の弥生土器と宮ノ台式の弥生土器が共伴して出土しており、規模も木曽免遺跡では最大である。木曽免遺跡では既存の調査により弥生時代中期後半を中心として古墳時代前期までの遺構がまとまって検出されており、当該期における具体的な状況が明らかになりつつある。本遺跡の調査成果はこれを補うものと言え、弥生時代中期後半から古墳時代前期にかけての集落域や墓域の一端を示した。

木曽免遺跡６区

2021 年（令和３年）３月 26 日　発行

発行者　埼玉県坂戸市教育委員会
埼玉県坂戸市千代田一丁目１番１号

印　刷　朝日印刷工業株式会社
群馬県前橋市元総社町 67 番地